

近松の俊寛像と『源平盛衰記』

正 木 ゆ み

はじめに

『平家女護島』は、享保四年（一七一九）に、大坂竹本座で初演された近松門左衛門の時代浄瑠璃（時代物）である。本作の二段目切「鬼界が島の段」は、一人、絶海の孤島鬼界が島に残る俊寛僧都のドラマを劇的に描いた場であり、現代の文楽や歌舞伎の舞台でも人気の高い演目となっている。

従来、「鬼界が島の段」については、『平家物語』、『源平盛衰記』、謡曲『俊寛』などの先行作に描かれた俊寛説話の表現やエピソードを典拠としつつ、そこに近松がアレンジを加えて、新たな俊寛像を創造していることが明らかにされている¹⁾。近年の研究では、坂本美加『平家女護島』の俊寛像―近松の劇空間を意識づけるもの―（『文学史研究』41、二〇〇〇年十二月）において、近松が、整版本の『平家物語』（以下「整版『平家』」と略記）を縦横に読み込み、整版『平家』における鬼界が島での俊寛の姿の描写や、俊寛が島に残される時の足摺の場面の描写を、『平家女護島』以前の時代物の諸作に利用し、それらを集大成する形で、「鬼界が島の段」の俊寛の描写がなされていることが明らかにされた。このような研究

などからも、「鬼界が島の段」を創作する近松にとって、整版『平家』が重要な典拠であったことは確実であろう。

一方、『平家物語』の一異本である『源平盛衰記』については、従来、若干の表現やエピソードが「鬼界が島の段」の典拠として指摘されているものの、整版『平家』や謡曲『俊寛』に比して、「鬼界が島の段」の典拠としては余り重視されておらず、その撰取の様相も十分に検討されていないように思われる。しかし、整版『平家』と共に、近世、版本として流布した『源平盛衰記』（以下『盛衰記』と略記）には、俊寛説話に限っても、整版『平家』には見られない表現やエピソードが多く見出され、近松が、「鬼界が島の段」の俊寛像を造形する際に、そういった『盛衰記』の表現やエピソードをも発想のヒントにした可能性は、十分あり得ると考えられる。

そこで、小稿では、従来「鬼界が島の段」の典拠として指摘されてきた『盛衰記』の表現やエピソードも含め、改めて近松の「鬼界が島の段」における俊寛像と『盛衰記』との関係について、再検討を試みるものである。

一 流人俊寛の描写

「鬼界が島の段」では、平家打倒の謀反に加わった科で、平判官康頼と丹波少将成経と共に、絶海の孤島鬼界が島に流された俊寛のやつれ果てた姿を、次のように描いている。

(1) 嶺より硫黄の燃出るを。釣人の魚にかへ波の荒布や干潟の貝。見るめにかゝる露の身は憔悴枯槁のつくも髪。肩に木の葉の綴刺せてふ虫の音も。枯れ木の杖に。よろ。く。よろくと(『近松全集』11巻「一九八九年、岩波書店」一四六―一四七頁。

以下「鬼界が島の段」の引用は同書による)

(1)の描写については、『平家女護島』の最新の注釈である新編日本古典文学全集『近松門左衛門集③』（小学館、二〇

○一年）所収『平家女護島』の頭注（阪口弘之頭注。以下「阪口注」と略記）に、整版『平家』巻三「有王が嶋下」の文辞を点綴していることが指摘されている。²「有王が嶋下」では、成経と康頼はすでに許されて帰京し、鬼界が島にたった一人取り残された俊寛を、かつて仕えていた有王という都の若者が訪ねて来る。ここは、その有王が鬼界が島で発見した俊寛の、見る影もないやつれ果てた姿の描写と、俊寛が、有王に島での不自由な生活を語った台詞を取り合わせている。

しかしながら、傍線部は、整版『平家』巻三「有王が嶋下」には見出せない描写である。では、この部分は、何に拠っているのだろうか。まず、「肩に木の葉の綴刺せ」から問題にしたい。整版『平家』巻三「有王が嶋下」では、有王が見た俊寛の「身に著たる物は、絹、布の分わかも見えず」（高橋貞一校注『平家物語(上)』一九七二年、講談社文庫。元和九年刊整版本を底本）二〇二頁。以下、整版『平家』の引用は同書による）とあり、「肩に木の葉の綴刺せ」という描写ではない。「肩に木の葉の綴刺せ」は、「肩に、木の葉を縫い合わせてかけており」という意味であり、「鬼界が島の段」では、このような、肩に、木の葉を縫い合わせてかけた姿は、他の流人にも共通する姿として描かれている。³（1）の場面の後、成経は、妻となった島の海士千鳥との馴れ初めを語る場面で、千鳥が成経のために「木の葉を集め縫綴る針手きよ」（一五〇頁）であると語っている。⁴さらに、千鳥が、一人、都への船に乗ることが許されず、成経と引き離されそうになった場面で、「（成経の）蓑虫の様な姿をもとの花の姿にして」（一五七〜一五八頁）たった一夜の契りを込めるのが夢だったのに、と嘆く。「蓑虫の様な姿」は、千鳥が木の葉を綴り合わせて作った着物で肩を覆っている成経の姿をたとえたものである。阪口注では、この千鳥の台詞にある「蓑虫の様な姿」の注に、『盛衰記』巻九「康頼熊野詣」における鬼界が島での俊寛の描写「草木の葉を結集て著たりければ、おとろ蓑を戴ける蓑虫に似たり」（松尾葦江校注『源平盛衰記(二)』一九九三年、三弥井書店。慶長古活字版を底本）一〇三頁。以下『盛衰記』の引用は同書による）をあげている。⁵とすれば、（1）の傍線部「肩に木の葉の綴刺せ」もまた、『盛衰記』巻九「康頼熊野詣」における俊寛の描写に拠っているとみてよいだろう。⁶すな

わち、(1)の流人俊寛の姿の描写について、近松は、大部分を整版『平家』卷三「有王が嶋下」の文辞に拠りながら、整版『平家』卷三「有王が嶋下」の着物の描写を採らず、『盛衰記』卷九「康頼熊野詣」の「草木の葉を結集て著たりければ」の描写をあえて選択したことになる。それは、なぜであろうか。おそらく、『盛衰記』における、「草木の葉」をわざわざ綴り合わせて着ている姿の方が、整版『平家』の破れた布をまとった姿以上に、島の流人の生活の哀れさ、苦難をより強く印象づけるものであり、「蓑虫」に似た姿は、視覚的にもどこかわびしげで、哀れ深い雰囲気（一）を漂わせて、観客の同情を誘うからだ（二）と推測される。

さらに、「鬼界が島の段」では、『盛衰記』の俊寛の「草木の葉を結集て著た」姿を、成経ら、他の流人にも共通する姿として描くことで、哀れな「蓑虫の様な姿」をした三人の流人の連帯感（第三章参照）や、成経を想いながら木の葉を綴り合わせつつ、その「蓑虫の様な姿」を「もとの花の姿」にしたいと願う千鳥の成経への切ない愛情をも表現し得たといえよう。

次に、(1)の傍線部「つくも髪（＝白髪）」について見ていきたい。整版『平家』卷三「有王が嶋下」では、「もとは法師にてありけりと覚えて、髪は空様に生ひあがり、萬づの藻屑取りつけて、荊（おどろ）を戴いたるが如し」（二〇二頁）とあるのみで、俊寛の髪が白髪であったという記述はない。また、俊寛が「つくも髪（＝白髪）」であるということについては、阪口注にも典拠の指摘はない。しかし、「つくも髪」もまた、『盛衰記』卷九「康頼熊野詣」における鬼界が島での俊寛の描写に見出せるものである。前述の「草木の葉を結集て著たりければ、蕨（おどろ）を戴ける蓑虫に似たり」のすぐ後に、「頭（かしら）は白髪長く生のびて、銀（しろかね）の針（みぎ）を研立たる様也。見（み）もうたてく恐し」（一〇三頁）とある。(1)の「つくも髪」は、この『盛衰記』の白髪の描写をヒントとして生み出された表現であろう。なお、『盛衰記』卷十「有王渡硫黄島」にも、一人、鬼界が島に残された俊寛を、有王が見つけた際の描写に、「法師かと思へば又髪は空様に生あがりて白髪多し。銀の針を立たるが如し。

万の塵や藻くづの付たれ共不打払」（一四〇頁）とあり、やはり、白髪が印象に残る俊寛の姿が描かれている。

整版『平家』巻三「有王が嶋下」では、俊寛が三十七歳で亡くなったとある。『盛衰記』には、俊寛の亡くなった年齢について記載はないが、巻九と十に繰り返し描かれる「白髪」の描写は、殺伐とした絶海の孤島鬼界が島で流人生活をおくった俊寛の苦難を視覚的に象徴するものとなっていることは間違いないであろう。「鬼界が島の段」の俊寛についても、特に年齢は記されないが、近松は、『盛衰記』巻九と十に繰り返し描かれる俊寛の「白髪」の描写を印象に留めて、(1)の傍線部「つくも髪」という表現を記し、やつれ果てた俊寛の哀れさを強調したのである。また、留意すべきは、整版『平家』巻三と『盛衰記』巻十に見える、髪が空様が上がっている鬼気迫る描写を、近松がここでは採っていないことである。そのような鬼気迫る髪の描写が、「鬼界が島の段」では、後述するような、千鳥と成経の恋を心から応援したり、仲間と心を通わせたりする俊寛のイメージとは合わないと判断したために、「つくも髪肩に（垂れ）」といった哀れさを漂わせる描写に改変したのだと思われる。

以上のことから、近松は、「鬼界が島の段」の俊寛のやつれ果てた姿の描写において、整版『平家』の俊寛の描写を大幅に利用しながらも、それだけにとどまらず、時に『盛衰記』における俊寛の描写の中からも、哀れさや流人生活の苦難をより強く印象づける視覚的な表現をわざわざ選び取り、種々アレンジも加えて利用していることが明らかになった。

二 「哀」な恋を応援する俊寛

「鬼界が島の段」では、成経が、島の美しい海士千鳥と恋に落ちて結婚し、その成経と千鳥との恋が、俊寛に、都に残した妻東屋への恋心を蘇らせ、流人生活で沈んだ彼の心に希望と癒しを与える。そして、明るく前向きで、一途に成経を恋い慕う千鳥の存在が、「鬼界が島の段」における俊寛の行動を大きく突き動かしていく（次章参照）。このように、「鬼界が

島の段」において重要な趣向の一つである成経と千鳥の結婚については、『盛衰記』巻九「康頼熊野詣」の次の記事に拠った可能性が指摘されている。⁽⁹⁾

「(前略) 係るうき嶋の習にも、自慰おのづからなぐさむ便もや」とて、少将は蟹あまの女に契を結び給て、御子一人出来給けり。後はいかゞ成にけん、そも不知。夫婦の中の契は、うかりし宿世と云ながら、最哀いとなりし事共也(二〇二頁)

この記事は、鬼界が島の流人となった丹波少将成経が海士と契り、一子を設けたが、その妻や子はその後どのようなになったかはわからない、というエピソードを記すものであり、このエピソードは、整版『平家』や謡曲『俊寛』には見出せない。前章で見たように、近松は、整版『平家』と共に、『盛衰記』の俊寛説話からも、微細な表現を拾い上げているのであるから、成経と千鳥の結婚についても、『盛衰記』のこの記事をヒントにした可能性は非常に高い。

ではなぜ、近松は、この記事に心を留めて、「鬼界が島の段」に利用したのであるのか。従来、この点については考察はなされていないように思われる。おそらく、近松は、この記事の傍線部に記される、『盛衰記』の語り手による感慨に注目したのではないだろうか。ここでは、『盛衰記』の語り手が、成経と海士の契りについて、「最哀いとなりし事共也」と、強い共感を示している。このような、『盛衰記』の語り手の共感と同様の思いを、近松もまた、この記事を読んで感じとったのではないかと推測される。⁽¹⁰⁾そして、近松は、「鬼界が島の段」では、そのような自身の思いを、成経と千鳥の結婚話を聞いて、心から喜び、そこに妻東屋への想いを重ねる俊寛の台詞に込めて表現しているのだと思われる。ここで、「鬼界が島の段」から、成経と千鳥との結婚を知った俊寛の反応を描く本文を二カ所引いてみたい。

(2) 「少将殿こそやさしき海士の恋にむすばれ。妻を設給し」と(康頼が)いふより僧都だいく莞爾と。「珍らしく」。配所三とせが間人

の上にも我上にも。恋といふ字の開始笑ひ顔も是始。(中略)濡れ始は何とく。俊寛も古郷に東屋といふ女房明暮れ思ひ慕へば。夫婦の中も恋同然。語るも恋聞も恋。聞たしく語給へ。(二四八〜二四九頁)

(3) 僧都聞入感にたへ。「扱々おもしろふて哀でだてと殊勝でかわいひ恋。(後略)。(二五一頁)

いずれも、成経と千鳥との結婚を心から喜び、応援する俊寛の台詞が記される。(3)の台詞は、成経の、明るく艶つばいのろけ話を聞いた俊寛の称賛の声である。この台詞の傍線部「哀で」という表現は、前述の『盛衰記』の語り手の感慨にあつた「最哀なりし事共也」の「哀なりし」という表現を思い起こさせる。近松が、この『盛衰記』の表現を意識して俊寛の台詞に取り入れたかどうかは判断が難しい。が、少なくとも、(2)(3)の俊寛の台詞から、近松は、『盛衰記』の語り手と同様に、『盛衰記』の成経と海士の結婚を「哀」と感じたからこそ、このエピソードに心を留め、「鬼界が島の段」に採り入れ、「哀」な恋を心から応援する俊寛像を造形したと見てよいのではないだろうか。『盛衰記』に描かれた片々たる恋のエピソードと、それに対する『盛衰記』の語り手の感慨が、近松の創造力を喚起し、『盛衰記』では名もなかった海士が、「鬼界が島の段」では、海士千鳥というヒロインとして肉付けされて再生し、俊寛の心を動かしていったのである。

三 俊寛と流人仲間との連帯感

「鬼界が島の段」では、俊寛と流人仲間の成経・康頼三人の友情や連帯感が描き出されていることはすでに指摘がある⁽¹⁾。まず、「鬼界が島の段」から、そのような場面の本文を引いてみる。

(4) 「なふ少将殿」「なふ康頼。」「こは俊寛か」「僧都か」と招き合あゆみ奇。「友なふ(11伴う)人としては明ても康頼。暮れても少将。

三人の外なき物を何とてか音づれ絶へ。山田もらねど世に飽きし。僧都が身こそ悲しけれ」と手を取交はし泣給ふ。(二四八頁)

これは、(1)の俊寛のやつれ果てた姿の描写の後、俊寛が、久しぶりに康頼・成経と対面して、しばらく二人に会えなかった辛さを語り、二人と手を取り交わして嘆く場面である。(4)の場面から、俊寛が、流人仲間の成経・康頼を心から頼りにしており、少しでも会えないと寂しさに堪えられない、といったことがうかがえよう。

(5) 「此三人は親類同然。別して今日より親子の約束我娘。あはれ御免かうふり四人つれて都入」(二五二頁)

(6) 飲歌へ。三人四人が身の上をいはうが島も蓬萊の(二五二〜二五三頁)

(5)は、成経から千鳥を紹介された俊寛が、喜びの余り千鳥を娘とすることを宣言し、四人で帰京したいという願いを語る場面である。傍線部からも、俊寛の流人仲間への連帯感がうかがえる。この「三人」の連帯感は、千鳥を加えて、「四人」のものとなり、(6)の、成経と千鳥の結婚を祝う酒宴では、「三人四人が身の上」を祝っている。

(7) 「何三人共の御赦か。」「中々。」「ハアハアはあ」と俊寛は。真砂に額をすり入く三拝なして嬉し泣(二五五頁)

ここは、先行作と大きく違い、俊寛もまた、平重盛と能登守教経の恩情で許され、帰京できることが判明し、願い通り「三人共の御赦か」と喜び、嬉し泣きしている場面である。しかし、喜びもつかの間、都からの使者の一人瀬尾が、千鳥を船に乗せることを許さないのです。成経が千鳥と共に島に残ることを決めて、俊寛と康頼に船に乗るよううながす。それに対して、

(8) 「流人は一ツ致我々も帰まじ」と。三人浜べにどうど座を組。思ひ定し其顔色。(二五六頁)

と、他の二人も帰ろうとせず、三人一致団結して浜辺に座り込むのである。その三人を瀬尾は無理やり船に乗せ、一人

島に残される千鳥は足摺をして嘆く。瀬尾から、東屋の死を吐き捨てるように聞かされた俊寛は、帰京しても希望がないことを悟り、千鳥を船に乗せ、若い夫婦の幸せをかなえてやるために、自分は、瀬尾を殺して罪を加え、ただ一人島に残ることを決意する。その別れの場面では、

(9) 少将夫婦康頼も。「名残惜しやさらばや」と言ふより外は涙にて。船よりは扇を上陸（あづま）よりは手を上て。互に「未来でく」と呼はる声も（二六三頁）

と、一人島に残った俊寛を思いやって、船に乗った成経千鳥夫婦と、康頼が涙を流す。

さて、以上見てきたように、「鬼界が島の段」では、流人三人、後には千鳥を加えた四人の友情や連帯感が繰り返し描き出され、(9)の別れの場面が哀切なものとなるように計算されていたことがうかがえる。では、このような、俊寛と流人仲間の友情や連帯感は、先行作ではどのように描かれていたのであるうか。

まず、整版『平家』から見てみたい。整版『平家』巻三「足摺」では、中宮御産の祈りのための大赦で、成経と康頼の二人だけが許され、俊寛一人が許されず、島に残されることになり、成経の袂にすがって悶え泣く。それに対して、成経も、俊寛を一人残して行くのは心苦しいが、都の使者に従うしかない、帰京したら清盛の機嫌をうかがって、俊寛を迎えに人を寄越そうとなだめる。やがて、成経と康頼を乗せた船が出ると、俊寛は、

船に取りつき、「さて如何に各俊寛をば終に捨てはて給ふか。日頃の情も今は何ならず。赦され無ければ都までこそ叶はずとも、せめてはこの船に乗せて九国の地まで」と口説かれけれども（一八二〜一八三頁）

傍線部からは、俊寛が、日頃成経や康頼と交情があったこともうかがわせるが、整版『平家』では、このような記述は、

このこと、一人取り残された俊寛が、「少将は情深き人」(一八三頁)なので、清盛にうまく執成してくれるだろう、と頼みに思う部分(卷三「足摺」)ぐらいである。よって、整版『平家』では、俊寛と流人仲間との交情や連帯感はほとんど描かれていないといってよい。

それに対し、『盛衰記』では、整版『平家』にはほとんど描かれていない、鬼界が島での流人仲間同士の交情や、俊寛が、それに感謝していたことをうかがわせる本文が、比較的多く見出せる^②。

『盛衰記』卷九「康頼熊野詣」で、鬼界が島に都の使者が訪れ、自分一人だけ許されなかったことを知った俊寛が、「年比日比は、三人互に相伴、昔今の物語をもして慰つるすら猶忍かねたりき。今人々に打捨られ奉なば、一日片時いかにして堪過すべき。(後略)」(一〇四頁)と、日頃流人仲間三人で昔今の物語をして慰めあつてさえ、孤独に耐え兼ねたのに、一人見捨てられてはとて堪えられないと嘆く。このような、流人仲間と日頃から交情があり、その中でさえ、孤独に耐え兼ねて涙を流すことがあつたという、『盛衰記』の俊寛の姿は、(4)に引いた、流人仲間と交情がありながらも、一人でいる時は孤独に堪えられない俊寛の姿と重なってくるのではないだろうか。以下、俊寛が、流人仲間と交情があつたことをうかがわせる例を、『盛衰記』から拾ってみよう。

『盛衰記』卷九「康頼熊野詣」でも、整版『平家』とほぼ同様、帰京を許された成経と康頼が、一人残される俊寛をなだめるが、それに対して、俊寛は、

「日來の歎は思へば物の数ならず、古郷の恋しき事も、此嶋の悲き事も、三人語て泣つ笑つすればこそ慰便とも成つれ。其猶堪忍かねては、憂音のみこそ泣つるに、打捨て上給なん跡のつれなく、兼て思にいかにせん。さて三年の契絶はて、独留て帰上り給はんずるにや、穴名残惜やく」とて、二人が袂をひかへつゝ、声も惜ずをめきけり。(一〇五頁)

やはり、日頃故郷の恋しいことも、島でのつらいことも二人で分かちあったことを繰り返して語る。やがて、一人残された俊寛は、「さても庵に帰りたい共、友なき宿を守て、事問者も無れば、昨日までは三人同く歎きしに、今日は一人留りて、いとゞ思の深なれば、角ぞ思続け」（一〇七頁）るのであった。傍線部のように、他の二人を「友」とする表現は、整版『平家』には見出せない。三人の交情や共に嘆いた連帯感があったからこそ、一人残された深い孤独感が描き出されるという点でも、近松の「鬼界が島の段」に通じる。

成経と康頼との交情の思い出は、『盛衰記』巻十「有王渡硫黄島」でも、鬼界が島を訪れた有王に俊寛が、「（前略）さても少将と判官入道との有し程は、憂事悲事云連ては泣つ、思出有し昔物語をしては笑つ、互に慰しに、被打捨し後は、一日片時堪て有べし共覚ざりし（後略）」（一四三頁）と語っている。さらに、『盛衰記』巻十一「有王俊寛問答」では、有王に、どうやって今まで命を繋いできたのかと聞かれた俊寛が、

「其事也。三人被流たりしに、丹波少将の相節とて、舅門脇宰相の許より、一年に二度舟を渡し、也。春は秋冬の料を渡し、秋は春夏の料にとて渡しを、少将心様よき人にて、同嶋に流され、同所に有ながら、我一人生てまのあたり各を無人と見ん事も口惜かるべし、三人あればこそ互に便ともなり、又慰めとて、一人が食物を三人に省はぶき、一人の衣裳の新きをば我身に著、古をば二人に著せつ、兎角はくくみ育し程は、人の体にて有しか共、去年此人々還上て其後は、事問ふ者もなく、情を懸る人もなければ（後略）」（二五一頁）

と語る。この台詞から、「心様よき」成経が、季節ごとに自分のもとに届いた舅からの衣服や食料を独り占めせずに、俊寛と康頼とも惜しみなく分かちあったこと、そういった成経に俊寛が心から感謝していたことがうかがえる。だからこそ、余計に二人が帰京した後の孤独感が際立つ。

以上は、『盛衰記』における俊寛を通してうかがえる、流人仲間の交情であるが、成経と康頼もまた、『盛衰記』巻九

「康頼熊野詣」の、足摺をして嘆く俊寛を一人島に残していく場面で、「誠にさこそ思らめと、少将も康頼も涙にくれて漕行空も見えざりけり」（一〇六頁）とある。俊寛との別れの場面で、成経と康頼が涙を流すという表現は、整版『平家』には見出せない。「鬼界が島の段」の（9）は、あるいは、『盛衰記』のこの場面に拠るのではないだろうか。また、『盛衰記』巻十「丹波少将上洛」では、成経と康頼が、帰京の途次、一人島に残して来た俊寛の身を思いやっている。

二人は道すがら、硫黄島の心うかりし事共語り連ても、俊寛僧都をぞ悲みける。「只一人嶋の巢守と成果て、思に堪ずはかなくや成ぬらん。又猶も生て有ならば、いかばかり歎き悲むらん、糸惜いとほしや。三人有しにだにも、僧都は殊に思入たりしに、増て友なき身と成てはさこそ有らめ」と、互に袖を絞けり。（一三三頁）

傍線部から、成経と康頼は、自分たちを俊寛の「友」と思っていたこともうかがえる。以上の『盛衰記』の例から、『盛衰記』は整版『平家』と異なり、俊寛と流人仲間に交情があったことを繰り返して描いていたことが明らかになった。近松が、「鬼界が島の段」において、俊寛と流人仲間との友情や連帯感を描き出したのは、俊寛と流人仲間との交情があったこと、及び、それに対する俊寛の感謝の思いを繰り返し描く『盛衰記』に示唆を受けたからではないだろうか。

なお、謡曲『俊寛』については、従来、「鬼界が島の段」の（6）の酒宴の場の典拠として指摘されている。¹³ 謡曲『俊寛』では、流人仲間の三人が、山水を酒に見立て、互いに故郷を懐かしんで、憂さを慰め合う。『盛衰記』の三人の交情をより具体化した場面といえよう。あるいは、この謡曲からのみでも、「鬼界が島の段」における俊寛と流人仲間との友情や連帯感という構想を発想できるのではないかという見方もあるかもしれない。しかし、小稿第一、二章の例からも、近松が『盛衰記』の俊寛説話を読み込んでいたのは確実であるから、本章であげた『盛衰記』の本文もまた、謡曲『俊寛』と共に、大きな発想のヒントになった可能性は高いと思われる。

四 「俊寛が乗は弘誓の船」・「思ひ切ても凡夫心」

最後に、「鬼界が島の段」における、俊寛が一人、島に残る場面と『盛衰記』との関係を見ておく。まず、「鬼海が島の段」の当該場面から、二ヶ所本文をあげる。

(10) 「我此島にとゞまれば五穀に離し餓鬼道に。今現在の修羅道硫黄の燃ゆるは地獄道。三悪道を此世で果てし。後生を助けくれぬか。俊寛が乗は弘誓の船うき世の舟には望なし(後略)」(一六二頁)

(11) 思ひ切ても凡夫心。岸の高見にかけあがり。爪立て打招き浜の真砂に臥まろび。焦がれても叫びても。(一六三頁)

先に、(11) について述べる。これは、俊寛が足摺をする場面であり、傍線部は、「鬼界が島の段」の中でも特に著名な表現である。決意してもなお、いざとなると帰京への未練を捨て難い、自身の「凡夫心」に俊寛が直面する。従来指摘がないが、『盛衰記』巻十一「有王俊寛問答」における俊寛の台詞の中に、類似した表現が見出せる。『盛衰記』巻十一では、衰弱して死に瀕した俊寛¹⁴に、有王は浄土に赴くことを願うようにと説く。それに対して俊寛は、「二人は被召還、俊寛一人留し上は、思切てこそ有しか共、凡夫の習なれば、折々には去共さりともと憑む心も在き(後略)」(一五三頁)と語る。一人島に残されて覚悟を決めたものの、やはり、「凡夫の習」で、いつか帰京できるのではないかという望みを抱くこともあったと言ふ。この台詞は、整版『平家』には見出せない。

もちろん、「思(ひ)切た」ものの、「凡夫心」を捨て切れないという発想は珍しいものではないだろう。しかし、小稿で見てきたように、近松は、『盛衰記』の俊寛説話における、整版『平家』には見出せない表現やエピソードにも心を留めて、「鬼界が島の段」の俊寛像を造形するに際してのヒントとしていた可能性がある。とすれば、(11)の傍線部もまた、

『盛衰記』卷十一の俊寛の台詞の傍線部をヒントにして記された可能性があるのではないだろうか。

(10)は、俊寛が、自分の代わりに千鳥を船に乗せる時に、千鳥を諭した台詞である。最愛の妻を失って、この世での望みを断たれた自分が乗るのは、帰京の船ではなく、傍線部のように「弘誓の船」であると語る。「弘誓の船」に乗るといふ望みは、『盛衰記』卷十一「有王俊寛問答」における、死に瀕した俊寛が、有王に語る台詞の中にも見出せる。

「丹波少将も康頼入道も帰洛の後は、毎日に法華經一部を暗誦し、よもすがら弥陀念仏を唱て、一筋に後世の為と廻向して今に不怠。夫来迎の金蓮には、貴も賤も俱に乗、弘誓の船筏には、富るも貧をも渡し給と聞ば憑あり(後略)」（一五四〜一五五頁）

俊寛は、一人で島に残されてからは念仏を唱え、「弘誓の船筏に」乗ることに望みを抱くようになったと言う。この台詞も、整版『平家』には見出せない。「弘誓の船」も「凡夫」と同様、仏教語であり、典拠がなくても容易に思いつく表現ではある。しかし、『盛衰記』で俊寛が語っている台詞の中に見出せる表現であることは、留意してもよいと考える。先の「思ひ切ても凡夫心」と同様、(10)の「弘誓の船」も、『盛衰記』卷十一の俊寛の台詞を意識して記された可能性があることを、新たに指摘しておきたい。

『盛衰記』卷十一「有王俊寛問答」では、俊寛は、有王から浄土に赴くことを願うことを諭され、「凡夫」の迷いを捨てて静かに「弘誓の船筏に」乗ることを望む。それに対し、近松は、「弘誓の船」に乗るといふ決意はしたものの、なお未練を残す俊寛の「凡夫心」を描き出し、観客が感情移入しやすい、より人間味溢れる俊寛像を造形しているのである。

おわりに

以上の考察から、近松が、整版『平家』や謡曲『俊寛』と共に、『盛衰記』の俊寛説話をも十分に読み込み、整版『平

家』には見出せない『盛衰記』の表現やエピソードにも心を留め、それらをヒントとして、「鬼界が島の段」の俊寛像を造形していた可能性が高いことが明らかになってきた。整版『平家』や謡曲『俊寛』ほど大幅な文辞の利用が見られないため、『盛衰記』は、「鬼界が島の段」の典拠として余り重視されてこなかったが、小稿で述べたように、俊寛像の造形に、『盛衰記』が、従来考えられていたよりは、深く関わっている可能性があることは、注目されてよいと思われる。

「鬼界が島の段」の他にも、近松が、時代浄瑠璃を創作するに際し、整版『平家』と共に『盛衰記』をどの程度、またどのように利用しているのかについて、今後検討を加える必要があるだろう。

注

(1) 向井芳樹「近松が描いた俊寛について」(『近松の方法』一九七六年、桜楓社)、榎本成子「近松の俊寛像」(『熊本女子大学国文研究』26、一九八〇年十月)、田中美絵「俊寛説話の流れ―「語り」と「読み」の問題―」(『学習院大学国語国文学会誌』38、一九九五年三月)など。

(2) 新編日本古典文学全集『近松門左衛門集③』四八四―四八五頁の頭注五、四八五頁の頭注八参照。

(3) 『平家女護島』の絵入本の挿絵(『近松全集』17巻影印「一九九四年、岩波書店」四〇―一頁上段)には、俊寛、康頼、成経とその妻千鳥の四人が肩や腰に、木の葉を縫い合わせて付けている姿が描かれる。

(4) 近松の時代浄瑠璃『百合若大臣野守鏡』(以下『百合若』と略記)(正徳元年「一七一―」初秋以前 竹本座)第三では、家臣の裏切りにより絶海の孤島に一人残された百合若大臣のもとに、妻立花(実は亡き立花の魂が、鷹の羽の不思議によって、鷹の体を借りた化身)が恋い慕って来て一子還城丸をもうける。この立花について、「ことに立花女工の手きき。(中略)木の葉を綴りて縫ひ物し。親子の肌を隠すにぞ」(『近松全集』7巻「一九八七年、岩波書店」三九二頁)という描写があり、千鳥との類似性が見られる。

「はじめに」で触れた坂本論文(五一―五二頁)に、『百合若』第三の、絶海の孤島に置き去りにされた百合若の描写に、整版『平家』の鬼界が島での俊寛のイメージが投影されており、それが、さらに「鬼界が島の段」の俊寛の描写に取り込まれているとの指摘がある。それと同様に、『百合若』第三、立花が木の葉を綴り合わせて百合若親子に着せたという描写については、近松が、『盛衰記』の木の葉を身にまとった俊寛の描写から発想した可能性がある。さらに近松は、『百合若』第三の、木の葉を綴り合わせる立花やそれを着た百合若親子の描写を、「鬼界が島の段」の木の葉を綴り合わせる千鳥、及び、木の葉の着物を着た俊寛、成経ら流人たちを描く際に利用した可能性があるのでないだろうか。

(5) 注(2) 前掲書四九三頁頭注八参照。

(6) 注(2) 前掲書四九三頁頭注八には、同書の四八四頁を参照することを指示している。同書四八四頁本文五―六行目には、「肩に木の葉の綴り刺せ」の本文があるので、この本文が、「蓑虫の様な姿」と関連することを示唆しているのだと思われる。ただし、「肩に木の葉の綴り刺せ」の部分について、同書頭注では『盛衰記』との関係を指摘していない。

(7) 『枕草子』「虫は」の段、『風俗文選』(宝永三年「二七〇六」刊)巻之四「蓑虫の説」などに描かれる蓑虫のイメージ参照。

(8) 都に残した妻東屋は、『平家女護島』初段で、清盛の横恋慕を拒否し自害する。俊寛は、このことを「鬼界が島の段」において、都の使いが来るまでは知らないままである。「鬼界が島の段」における俊寛の妻東屋への想いについては、注(1)前掲田中論文(六〇頁)に、近松が、整版『平家』にあった、俊寛の妻や家族に対する愛情に注目した結果描き出されたものとの指摘がある。

(9) 注(1) 前掲向井論文(九二頁)、島津忠夫「作品研究『俊寛』(八頁)『観世』44―10、一九七七年十月)など参照。

(10) 注(4)で触れた『百合若』第三で、絶海の孤島に置き去りにされた百合若が、妻立花とめぐりあい、一子をもうけたことを、島に訪ねてきた家臣に「憂きが中のなぐさめ」(『近松全集』7巻三九八頁)と語っている。この、絶海の孤島での百合若と立花の契りも、あるいは、『盛衰記』の成経と海士の契りをヒントにして発想されたものではないだろうか。

(11) 注(1) 前掲向井論文(九二頁)など参照。

(12) 以下にあげる、俊寛と流人仲間の交情や、それに対する俊寛の感謝を描く『盛衰記』の本文については、延慶本『平家物語』などと重なるところが多い。なお、廣岡志津子「俊寛説話研究―平家物語及び近世文学における―」（『東京女子大学日本文学』33、一九六九年十月）に、流布本（整版）『平家』に比して、『源平盛衰記』の俊寛が「弱き同情されるべき人間」（四頁）として造形されているという指摘がある。

(13) 藤井乙男校注『近松全集』11巻（一九二八年、朝日新聞社）所収『平家女護島』七八六頁頭注など参照。

(14) 整版『平家』巻三「有王島下」では、俊寛は、有王から都に残した妻子の死を聞かされて希望を失い、自ら食事を断つて衰えていくが、『盛衰記』には、俊寛が自ら食事を断つということは見られない。

※引用に際しては、適宜漢字を宛て、濁点や「」を付し、ルビを略したところがある。『盛衰記』のカタカナ表記はひらがな表記に改め、返り点は略した。「鬼界が島の段」の節章は略した。なお、（ ）内の注と傍線は稿者による。

付記

小稿は、正木（山崎）担当の二〇〇二年度京都女子大学短期大学部の講読近世A・B、及び二〇〇三年度京都女子大学短期大学部の国文学史Aの講義内容の一部に、その後の調査を加えてまとめたものである。

（本学助教授）